



「親と子の談話室『とぼす』が繋ぐ人の輪」

しらね よしこ
白根 良子

1936年(昭和11年)
福島県湯野町
(現福島市)生まれ、
西一之江在住



子どもだけで入れる喫茶店誕生

最初は思春期の子どもたちにゆったりと過ごしてもらうのが目的だったんです。「ここへ制服で入って来てても通報はしないでください。ここで起きたことはすべてわたしが責任を取ります」と、教育委員会や近隣の学校に挨拶に行き、子どもだけでも入れる図書コーナー付きの喫茶店「とぼす」を始めました。昭和62年4月でした。そのころ、中学校のPTA活動に下校指導があつて、木の下でたむろしてしゃべっているだけで、注意されたんですよ。子どもが集まっているところでは悪いことしか起こらないと大人は思っていたんでしょうね。

子どもが中学2年の時にプラスバンドのコンクールで銀賞を取ったのが嬉しくて、喉も乾いていたので仲間と喫茶店に入ってジュースを飲んでいたら、それを近所の人に見られて学校に通報されたんです。なぜ喫茶店に入ったのか理由を聞いてほしかったです。

「とぼす」とはギリシャ語で「場所」という意味。居心地のいい平安な場所になってほしいとの思いでした。子どもたちはここで本を読んだり、音楽を聞いたり、新しい友だちを作ったり、親には話せない悩みごとを大人に相談したりできるんです。わたし一人じゃなくて、ここに来る大勢の大人との出会いの中で、「こんなことで悩んでいるだけけど」、「そんなこと心配しなくてもいいんだよ」と語り合っていたんです。最初のころは、小学生から高校生までたくさん来ました。「他の人たちにも聞いてもらいたいことがあるなら紙に書いたら」って小学生に勧めると、「とぼす新聞」や「あゆみ新聞」など、仲間同士で即席の新聞を作っちゃった。いじめを主題にした新聞もあったんですよ。

子どもたちは自由におしゃべりを楽しんで、大人たちは親のような気持ちで見守っています。この25年の間、ここで問題が起こったことはありません。

「人はなして死ぬんだべ」

わたしは昭和11年、湯野町(現福島市)で生まれまして。わたしが2歳の時、教師だった父母は、わたしと生後

4ヶ月の妹を連れて満州の大連へ渡ったんです。大連が日本の領土になって、新天地をめざしたんですね。そこで、父は中学校、母は小学校の教員になりました。

わたしは6歳になると、母の勤める沙河口国民学校に通うようになりました。母が買ってきてくれたパジャマがすごく気に入ったので、制服の代わりに着て行ったり、父の宿直について行って学級文庫の本を読んだり、自由に楽しい3年間でした。ところが、3年生の夏に終戦になると学校は閉鎖されて、わたしたち家族の生活も一変しました。でも、よく先のことを考える父や母のおかげで、昭和22年の春に無事に帰国しました。一家で福島県あまらめの余目村(現福島市)の母の実家に住み、わたしは余目小学校5年生に入りました。

福島女子高等学校に進学したわたしは、「仕事がしたいから、一生独身で暮す」とか、サイドカーに乗っている記者にあこがれて、「新聞記者になりたい」と友だちに話していました。わたしたちの時代は、女学校を出たら結婚して子どもを産んで、良妻賢母になることをめざすのが普通。でも、わたしは一人で生きていきたくった。だから、「結婚しません」とか「間違っただけで結婚しても子どもは産みません」と言い切ったんです。

東京の大学にあこがれていたのですが、事情でいけなくなって、福島大学の教員課程に入りました。女性の職業があまりなかった時代でしたから。ところが、一般教養が面白くなって、4年も続けるのはいやだと思って、2年生に進級するとき2年制に編入したんです。そのころ、友だちとの縁で大学のキャンパス近くの教会に通うようになり、洗礼を受けてクリスチャンになりました。聖書の内容に惹かれて、大学で勉強をしながら夜間の神学校で聖書の勉強を続けたんです。

大学を卒業し、音楽の教師として赴任したのが、福島市の郊外にある野田中学校でした。そこで最初に受け持ったのが昭和19年生まれの子どもたちでした。桜の花の咲くころで、その子どもたちと一緒に花を見ていたら、「先生、人はなして死ぬんだべ」って訊かれました。きれいに咲いている花も、散るんですよね。中学1年生の子がこんなことを考えているんだ。でも、わたしはすぐには答えられませんでしたね。

人はなぜ死ぬのか、死んだらどうなるのか。聖書の知識はありました。でも、それを子どもに伝えることに躊躇ちゆうちよしました。自分も未熟だし、聖書の知識だけで生死の問題を教えるのはよくないと感じていましたから。でも、そのときの子どもたちにとっては、まだ若いわたしは話しやすい先生だったんですね。悩みのある子は家まで来て泊るんですよ。ほかのクラスの子たちも来ていましたから。

夢は語るべきもの

教師になって4年目の夏休み、「お父さん、学校を辞めて神学校へ行きます。先生でいるよりも、もっと良い実を結ぶから、もっと良い人生の実を結びたいから」と上京しました。そのとき父には、「また福島に帰ってきて、子どもたちと語り合える場所を作るから」と言ったんです。父は校長先生でしたから、「クリスチャンの先生がいるのも校長にとっては助かることだよ。人の子どもを預かっているということがよくわかるから。そこまで決心しているなら、やってみることだ」と言って賛成してくれました。これが「とぼす」につながっているのかな。

9月に西千葉の神学校に途中で入学すると、すぐに前期の試験になってしまいました。そこでいろいろ教えてくれたのが夫です。夫は牧師になる勉強をしていました。3年間一緒に授業を受けたでしょ。わたしのできないことが何でもできる場所に魅かれていきました。

神学校での勉強は3年で終わり、東久留米で彼と所帯を持ちました。「結婚もしない、子ども産みません」と言っていたわたしが、結婚しました。しかも子どもが6人もできました。江戸川区に移ったのは昭和41年、長女が生まれてすぐでした。同潤会通りでポリエチレン工場をやっていた夫の実家へ引越したんです。昭和45年に歩道ができると、車から原料の積み下ろしができなくなって、西一之江に引っ越ししました。

朝早くに起きて食事の仕度をして、ジーパンをはいて工場の仕事を手伝う。そのかたわらで、平井にある教会で聖書を教えていました。時間がなく忙しいのは、苦勞とも思っていなかったです。ただ、子どもにおっぱいをあげたり、絵本を読んだりしていると、「遊んでいる」と言われる。本当につらいことでした。わたしの育った家とは、やはりどこかで違うんですね。でも、途中から、わたし流の子育てをやるかと決心したの。何を言われても、本を読んで聞かせるようになりました。

昭和60年、父が亡くなりました。そのとき、「先生でいるよりも、もっと良い実を結ぶから」と言ったわたしはどこへ行ったのかなと思ったんです。父親の死を通して人生を振り返り、わたしのできることで、わたしの夢をかなえるチャンスだった。そのとき、ちょうど桜がね、満開だったんですよ。

わたしの夢は、子どもたち、中学生くらいの思春期の子どもたちが、やすらぐ場所に座って一緒に話をすること。それまでPTA活動や地域活動はかなりやっていたんですよ。そ

ういう場所があったらいいねとか、そんな話をしたりしていたんです。将来のことや悩みなど親には言えないことがどんどん増えていく思春期に、群れておしゃべりしたい子どもたちを切り離すなんて、わたしにはできません。

「よーし、それなら放課後の時間帯に、子どもが制服を着たまま入れる喫茶店を作ろう」と思ったんです。そのことを話すと、設計士の友人がわたしのイメージを膨らませて設計図を描いて、銀行からも融資を受けることができたんです。でも、わたしが「これを生活の糧かてにはしたくない」と相談したら、夫が働いたお金で返済してくれました。夢は語るべきものね。



◆「とぼす」で絵手紙を指導する白根さん(中央)

広がる人の輪

思春期は、将来の選択を迫られる時期でもあるんですね。だから、自分の人生の設計を考える場所として、いい大人との出会いができればと思っていたんです。でも、ゆとり教育といって土曜日が完全に休みになってから、子どもたちは部活や塾通いで忙しくなってあまり来なくなりました。

ここでは何も気にせず語りあってほしいの。大人も子どもも、病気や障害、年齢の差、男女の差、国籍の違いを意識的に取り払って、同じ人としてお付き合いしましょう。それがわたしの望む人と人のコミュニケーション。

中学生だった子が成人して訪ねて来るの。「だれだれちゃんでしょ」と言うと、「名前を覚えていてくれる」と喜んでくれたり、「結婚しました。これが女房です」と奥さんを連れて来た子もいます。

人の輪って広がるものですね。人が人を連れて来る。心を病む人たちとの集い「響きの会」、「絵手紙教室」、「歌と音楽の夕べの会」、「シネマクラブ」といくつもの会が生まれました。わたしのやりたいことを皆が拾って、実現してくれる。「とぼす」はそんな場所になったのかもしれないですね。

